

弥生

梅津純子

いつに見し雲一つ無き青空か僥倖のごと弥生の空晴る

残雪の山山は照り雪国の灰色の季の去りゆくを見る

次の歌集編まむと既に幾年かフクシマ辺野古ウクライナ続く

フクシマに辺野古埋め立て、ウクライナただごとならぬことの続きぬ

思はざる病の続き年年に残さむ歌の積み重なりぬ

歌集にはただごと歌も必要とふ亡き師の言葉をりをり甦る

陽だまりの青と黄色の除雪機よウクライナの子らに春はいつ来る

二〇二三年三月十日

再びの春陽の中の除雪機よウクライナの子らに戦火は止まず

二〇二三年三月四日

コロナ禍に生れたる孫も一歳半初に会はむと駅に急ぎぬ

とことこと歩き始めた小さき人わが知らぬ世を生きゆく背よ